

# 日本アニメーション学会賞 2023

## 選考結果・贈賞式のご報告

### 日本アニメーション学会賞 2023

『**Anime's Identity: Performativity and Form Beyond Japan.**』  
Stevie Suan 著 (2021年/University of Minnesota Press)

『**産業変動の労働社会学 ―アニメーターの経験史**』  
永田大輔・松永伸太郎 著 (2022年/晃洋書房)

### 贈賞式

日時：2023年11月3日（金）21:00～21:30

会場：新千歳空港国際線ターミナルビル 2F 会議室「ラベンダー」

※日本アニメーション学会 秋の研究集会との併催です。

取材申込みの際には下記の問い合わせ先までご連絡ください。

### 選考委員

石田美紀（新潟大学教育研究院人文社会科学系 教授）

中垣恒太郎（専修大学文学部英語英米文学科 教授）

堀ひかり（東洋大学文学部国際文化コミュニケーション学科 准教授）

宮本裕子（立教大学現代心理学部映像身体学科 准教授）

横濱雄二（甲南女子大学文学部日本語日本文化学科 教授）

[問い合わせ先] 日本アニメーション学会事務局

mail: [secretariat@jsas.net](mailto:secretariat@jsas.net)

[主催] JSAS 日本アニメーション学会

[www.jsas.net](http://www.jsas.net)

## ■ 贈賞理由

### Stevie Suan著『Anime's Identity: Performativity and Form Beyond Japan』

スティーヴィー・スアンの*Anime's Identity*は、「日本独自の文化」などと呼ばれることもある日本の商業用アニメーションについて、それが新自由主義経済とその文化における、ローカルかつトランスナショナルな性質を持つものであることを論じた著書である。スアンは、「アニメ」が日本の商業用アニメーションを指し、かつ日本に独自のものであるとする言説が、新自由主義的な産業構造と日本の経済政策における「クールジャパン」の中で形成された経緯を記述しながら、アニメの消費が国際的であること、また制作工程に多くの海外における下請け仕事と日本国内の外国人アニメーターの労働が介在していることを指摘する。そして、それが今日的な文化産業製品としてのトランスナショナルな性質であることを強調すると同時に、トランスナショナルなネットワークの中での日本の中心性もまた依然存続するという、アニメの複層的な性質を明らかにしている。

アニメのスタイルは、トランスナショナルな反復の中で構築される「パフォーマティヴ」なものであるが、国民国家の境界に制限されない国際的な関係性の中で同定される、新自由主義的なアイデンティティを持つものとして記述される。アニメは日本という地域に限定的なものではなく、また既存のメディア形式の議論からのみ記述できるものでもなく、トランスナショナルな無数のアクターによるネットワークの交差の中に、ローカル性を「パフォーマティヴ」に存続させながら構築されるものなのである。

特定の国民国家における産業と制作様式から生じ、かつ国際的なものとなった映像のスタイルとしては、古典的ハリウッド映画とそのヴァナキュラー化が先行しており、この点についての議論を踏まえることで、アニメのトランスナショナルな反復とスタイルの構築、アニメの脱中心性や独自性についての議論を深められたのではないかという意見が選考過程で出された。しかし、メディア、産業、文化、労働、スタイルを複合的に検討し、ローカルかつトランスナショナルな「メディア形式」としてアニメを記述する一貫した議論によって、既存のアニメ研究の枠組みを更新する著書であること、アニメを新自由主義的文化産業における複層的なアイデンティティとして捉える、進行形のアニメ理論であることが評価され、学会賞を贈与するに至った。

(選考委員・宮本裕子)

### 永田大輔・松永伸太朗著『産業変動の労働社会学——アニメーターの経験史』

『産業変動の労働社会学——アニメーターの経験史』は、永田大輔氏（文化社会学・メディア史・映像文化論）、松永伸太朗氏（労働社会学・ワークプレイス研究）による共著であり、アニメーションを題材とした社会学を共通基盤としながら、さらに、それぞれの細分化した専門領域に基づく知見を活用したユニークなアニメ産業労働研究の成果である。この著作以前にもこの両者による先行する共編著『アニメの社会学——アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』（ナカニシヤ出版、2020）がある他、個々の業績においてもそれぞれの社会学に関連した専門学会をはじめ論文発表を精力的に行っている。

密な共同研究による共著であっても担当箇所が明確に分かれていることが多いものであるが、本書はそれまでに公刊してきた論考を軸に、さまざまな研究会の場をも活用しつつ、セッションのように練り上げて制作されている。一見、非効率的に映る手法であるが、その分、細分化した専門性による方法論や観点、アニメ文化にまつわる体験の違いが織り成す議論の深まりが本書の奥行きとして現れている。練り上げて制作された工程からも、構成も明晰で文章も読みやすく、大学学部生や一般読者をはじめとする広い読者層に開かれている。このように隣接分野から成るセッション形式の共同研究のあり方は（皆にできる手法ではないだろうが）、学際的なアニメーション研究の将来性に大いに資するものであろう。

テクノロジーおよびメディア・労働環境の変化に伴うアニメ産業について、労働をめぐる問題、制作現場に携わる個々のキャリア形成の観点など、アニメ産業を労働社会学から捉える本書の試みはますます進展が期待される領域であり、理論・方法論、アニメ産業史・言説史を的確に辿っていることからこの領域の重要な基礎文献となるものである。インタビュー調査をめぐる方法論の批判的検討や国際状況の比較を含む継続・発展的な研究、さらに新たな学際的研究に繋がりうる可能性を有している点が高く評価され、学会賞贈賞に至った。

(選考委員長・中垣恒太郎)

## ■「日本アニメーション学会賞」について

「日本アニメーション学会賞」は日本アニメーション学会（1998年創立／[www.jsas.net](http://www.jsas.net)）の創立15周年記念事業として2014年に創設されました。

「日本アニメーション学会賞」は主としてアニメーション研究者の顕彰・奨励を目的としております。またその授賞対象は会員に限らないものとししました。これは現状においてはアニメーションあるいはメディア芸術の分野における顕彰・奨励が伝統的な分野とは異なり作家・クリエイター中心であり、創り手以外の研究者や教育者・批評家などへの顕彰・奨励の機会のごく限られたものであるからです。本学会員の間でも、かねてよりこれを解消すべき大きな課題であるとする意見が少なからずありました。

本学会がこの賞を設けることにより、若手研究者の奨励も含め、これまで顧みられることの少なかった研究者の顕彰を実現させたことは、学会としての社会的使命の一つを果たすことに繋がるのではないかと考えます（なお、学会賞の設置から10年の節目に、今年度より「奨励賞」の対象を学位請求論文、学術誌への初掲載論文・書籍などの最初の刊行物、に改定しました）。「日本アニメーション学会賞」がアニメーション分野あるいはメディア芸術分野の学術研究の活性化を促し、その一層の発展に寄与することを本学会員一同、心より願っております。

日本アニメーション学会ではこの賞を本学会会員皆の力で支え育て、末永くまた大きく発展させていきたいと希望しておりますので、関係各位の皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

日本アニメーション学会会長 須川亜紀子

※歴代受賞情報等は、以下をご覧ください。

>> <https://www.jsas.net/academic-award.html>